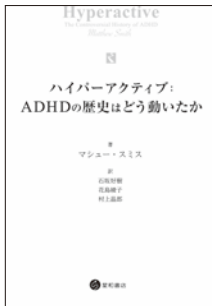


■ 書 評



ハイパーアクティブ： ADHDの歴史は どう動いたか

マッシュー・スミス 著
石坂好樹, 花島綾子,
村上晶郎 訳
星和書店

2017年10月 392頁
本体価格 2,700円+税

スコットランド州のストラスクライド大学の講師マッシュー・スミスが2012年に出版した“Hyperactive The controversial History of ADHD”を小児精神医学の専門である石坂好樹らが翻訳した書である。現在では同施設の教授になっている。医学史が専門と思われるが、本書の冒頭にて自らが多動症であり、彼の子どもも障害を抱えていることを開示し、さらに教育実習生時代にマッシューという同じ名前の多動症の子どもと出会ったエピソードが執筆した原動力となっていたことがうかがわれる。

日本語タイトルである「ADHDの歴史はどう動いたか」は、以前放送されていた国営放送の報道番組を思い出してしまうぐらい懐かしい響きと共に読者の関心をひきつける。

本書は序論から始まり、第一章「多動症以前」、第二章「最初の多動症児」、第三章「多動症論争」、第四章「リタリン：魔法の弾丸か黒魔術か」、第五章「代替の治療的接近法」、第六章「世界の多動症」と続き、結論として「上手に多動症を、か」で締めくくっている。

多動で集中できず落ち着かない子どもは以前からみられたが、学習障害、微細脳障害などさまざまな病名を経て ADHD と診断されるようになった経緯を、DSMの診断基準の変遷を織り交ぜながら詳細に解説している。昔は、このような子どもたちに対して周囲は寛容であった。しかし、ロシアに有人宇宙飛行で先を越された屈辱的な歴史から、アメリカは教育強化を打ち出し、その一環として集団学習にそぐわない子ども達をあぶり出した。その治療手段として、メチルフェンデートの使用が再び脚光を浴びる。その後、アメリカはアポロ11号の月面着陸という偉業を成し遂げ、ロ

シアを追い越した。著者はアメリカの教育危機という社会的背景が、ADHDの復活に大きな役割を果たしたことを強調している。その反面、自閉症の捉え方は社会の情勢により流動的で一貫せず、また、概念としての明瞭さに欠ける問題点は今でもくすぶり続けている。

本書では、図表は一切用いられていないうえ、アメリカ発信のADHDの概念の流行に、社会の情勢や製薬会社の思惑が見え隠れしているという批判的内容がくり返し述べられているため、若干飽きてしまう感がある。要旨を早く知りたいせっかちな読者は、「結論」から先に読むことをお勧めする。一方、ADHDの歴史を十分堪能したい読者は、過去の多くの研究の紹介が盛り込まれている第1～6章を順追ってじっくり読んでいただくとよい。700を超える豊富な参考文献と索引（人名と事項）が巻末に収載され、後で改めて振り返って調べられるようになっている。

多動症という診断を下すことは、単に障害者とレッテルを貼られるというデメリットだけではなく、診断をされることによって障害と認められ、薬物療法を受けることができ社会適応がスムーズになるというメリットがあることにも触れている。結論の小見出しである「上手に多動症を、か」に、記者の思いがにじみでている。ADHDや発達障害者にとっては、この「上手に」が非常に難しくて厄介である。ADHDの対応にかかわる医師をはじめ看護師、心理士、教職員や職業訓練士などは、ガイドラインを鵜呑みにせず、個々の患者に適したかわりをするのが求められる。インターネットが普及している現代では、障害に関する情報を患者自らが収集し、治療を選択するチャンスを与えられているが、子どもの場合には選択権はなく、親に委ねられてしまう。そのような時こそ、医療従事者が喧伝に翻弄されず、ベストと思われる指針を提示することが大切であろう。

本書は単に歴史を知るためのみの書ではなく、ADHDを取り巻く状況の把握を通して、実際患者を目の前にして、どのようにわれわれが対峙していかなくてはいけないか考えさせてくれる。これは、他の精神障害の治療場面でも同様であり、臨床経験の豊富な読者ほど一読していただきたい一冊である。

(忽滑谷和孝)